

小宮山博史◎講演会

だれが明朝体を作ったのか ～その誕生と歴史

日時: 2019年3月16日(土) 14時30分-16時30分

場所: 北島町立図書館・創世ホール

徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91 Tel:088-698-1100

その青年は、書家をめざし篆刻に関心を持った。彼はやがて佐藤敬之輔の著書に感銘を受け、佐藤の助手となる。佐藤の没後は、師の研究所を守りその灯をともし続けた。やがて彼は日本を代表する書体設計家、活字書体史研究家となり、多くの人の尊敬を集めるに至った。彼の名は小宮山博史。その五十余年の研究成果を四国徳島で語る最初で最後の奇跡の催し、ここに実現。興奮必至!多数ご参集ください。

小宮山先生のコメント◎「明朝体のデザイン様式は宋代または明代に書籍用の木版書体として開発されたが、それを今に続く印刷・表示用の代表書体に定着させたのは誰で、その理由は何か。活字史でほとんど語られることのない近代明朝体の誕生とその発展について、多くの図版を使って開設しようと考えている。」

小宮山博史プロフィール

こみやまひろし◎書体設計家、活字書体史研究家。1943年2月24日生まれ。國學院大学文学部卒。大学卒業後、佐藤タイポグラフィ研究所に入所。佐藤敬之輔の助手として書体史、書体デザインの基礎を学ぶ。佐藤没後、同研究所を引き継ぎ書体設計・活字書体史研究・レタリングデザイン教育を3つの柱として活躍。書体設計ではリョービ印刷機販売の写植書体、文字フォント開発・普及センターの《平成明朝体》、中華民国国立自然科学博物館中国科学庁の《表示用特太平明朝体》、大日本スクリーン製造(現・株式会社SCREENグラフィックソリューションズ)の《日本の活字書体名作精選》、韓国のサムスン電子フォントプロジェクトなどがある。武蔵野美術大学、桑沢デザイン研究所で教鞭をとり、現在は阿佐ヶ谷美術専門学校の非常勤講師。印刷紙研究会代表。(同校では昨年秋から字游工房の鳥海修氏と対話形式3時間の特別講義「明朝体の教室」を隔月開催、大きな忠告を集めている。)佐藤タイポグラフィ研究所代表。著書に『本と活字の歴史事典』(柏書房)『活字印刷の文化史』(勉誠出版)、『明朝体活字字形一覧』(文化庁、大蔵省印刷局)、『日本語活字ものがたり—草創期の人と書体』、『タイポグラフィの基礎』(誠堂新光社)、『文字をつくる～9人の書体デザイナー』(同、雪朱里著)など多数。

主催: 北島町立図書館・創世ホール

特別協賛: 佐藤タイポグラフィ研究所、(有)字游工房、ビーグラフィックス、誠堂新光社、
NPO法人日本タイポグラフィ協会、株式会社SCREENホールディングス

後援: 徳島新聞社、朝日新聞社徳島総局、毎日新聞社徳島支局、読売新聞大阪本社、四国放送(株)、
エフエム徳島、エフエムびざん、キューテレビ、ケーブルテレビ徳島、あわわfree、Geen、
タウン情報トクシマ、さらら、タウン情報CU*

協力要請: 徳島県内グラフィックデザイナー団体、徳島県内印刷業団体

企画者/連絡責任者: 小西昌幸(北島町立図書館等協議会委員長、創世ホールサポーター)